

# カンキツ品種「しらぬひ」の導入と栽培技術確立

## 第2報 果実の品質推移

平山秀文・藤田賢輔・重岡 開 (熊本県農業研究センター)

Hidehumi HIRAYAMA, Kensuke FUJITA and Hiraki SHIGEOKA: Introduction and the Studies of Culture Techniques on a Citrus Cultivar 'Siranui'

### 2. Transition of the Fruit Quality

最近、消費者の嗜好変化に伴い、甘夏の価格が低迷し、甘夏生産者に大きな打撃をあたえている。このため1985年よりポスト甘夏品種の探索に取り組んだ結果、農林水産省果樹試験場口之津支場で育成された「しらぬひ」を選択した。そこで品種特性把握の一環として、時期別による果実の品質推移について検討した。

#### 1. 材料及び方法

##### 試験1

1985年3月に2年生苗木を地中熱交換ハウス(11月下旬ビニル被覆、7月上旬除去)に植栽した。1987年より結果した中から3樹を供試し、4年間にわたり定期的に(1樹4果、3反復)採取し分析した。

##### 試験2

現地における「川野なつだいだい」中間台木(30年生)に高接した5年生(結実3年目)、3樹(樹容積14.4m<sup>3</sup>、着果数161果、収量39.5kg/1樹平均)を供試し、1990年12月26日、'91年1月22日、2月25日の3回にわけ採取し、全果を分析した。

#### 2. 結果及び考察

##### 試験1

糖度の推移をみると11月から1月までは若干年次差はみられるものの、一定の傾向で上昇するが、それ以降は年次変動が大きかった。特に1989年は12月以降の糖上昇が鈍かったのに対し、'90年では1月以降も糖の上昇が大きかった。

4年間の平均糖度は11月は10度台であるが、12月で12~13度、1月以降は14度以上に達した。クエン酸はハウス内が温暖な条件であったためか、酸含量は少なく推移し、12月1.1%であり2月には食味的に良好といわれる0.9%台になった。

果肉歩合は11月、12月は75~77%であったが、1月以降、果実の二次肥大がみられ、2月には72%と減少した。果汁歩合は11月から2月までほとんど変わらず78%前後を示した。

一方、樹の生育は「清峰」に比べ劣るが、4年間の累積収量は106.7kg/本に対し、「清峰」は90.8kg/本であり、m<sup>2</sup>当たり収量も4.2kg、「清峰」3.0kgと多くなった。

##### 試験2

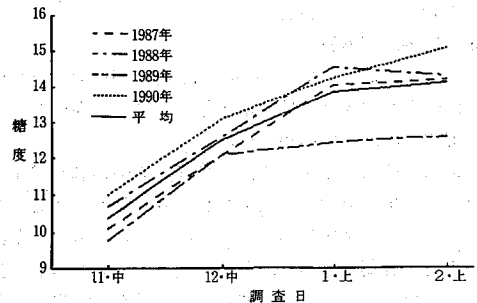
採取時期別の果実品質のうち平均糖度は、12月では11.6度、1月13.8度、2月14.4度であり、若干1月と2月

のバラツキが大きかった。クエン酸含量は12月下旬1.3%、1月下旬1.2%、2月1.0%となり、バラツキは12月で大きく、2月で小さくなった。

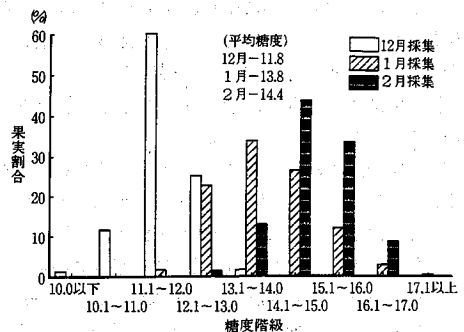
果肉歩合は12月、1月はほとんど変わらず77%であったが、2月は若干減少し74%となった。果汁歩合は12月、2月で若干低く、1月で高くなった。

一方果皮色(色差計a値)は採取が遅くなるほど上がる傾向がみられた。

以上のことから「しらぬひ」の果実品質は、外観的には若干粗さがみられるものの、1月から2月にかけての糖度が高く、酸が比較的少ない、品質的には優れた果実であった。



第1図 年次毎の糖度の時期別推移



第2図 一樹内における糖度の時期別分布